

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	風客仁木充長（三）：元禄十五年・享保五年・享保七年項追補
Author(s)	久保田, 啓一
Citation	国文学攷, 250 : 15 - 28
Issue Date	2021-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051486">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051486</a>
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



風客仁木充長(二二)  
— 元禄十五年・享保五年・享保七年項追補 —

久保田 啓 一

はじめに

本稿は、拙稿「風客仁木充長―出生より享保十年まで」(浅田徹・小川剛生・兼築信行・神作研一・田渕句美子・堀川貴司編『和歌史の中世から近世へ』(花鳥社、二〇二〇年一月二五日)所収。以下「前稿」と呼称する)、同「風客仁木充長(二)―享保六年項追補―」(『国文学攷』二四七号、二〇二〇年九月三〇日。以下「前稿(二)」と呼称する)に続くものである。前稿で立てた項は○、追補分の項は●で示し、『在京随筆』に依拠する場合は『近世歌学集成(中)』(明治書院)の頁数を添えるなど、記述の方式は前稿(二)に准ずるの  
で、適宜<sup>①</sup>参照をお願いしたい。

また、冷泉家蔵典籍に関わる充長の記述については、前稿に言及した海野圭介氏「仁木充長所校本覚書」(島津忠夫先生古稀記念論集刊行会編『島津忠夫先生古稀記念論集 日本文学史論』(世界思

想社、一九九七年九月一八日)所収。以下「海野氏稿」と略す)に触れるところがある。本稿では充長の動静を汲み上げることを目的とし、書誌的な事項の詳細には立ち入らないので、海野氏稿を併せて<sup>②</sup>参照頂きたい。

なお、前稿・前稿(二)ともに、歌学書の奥書等は当該書の全般的な検討に委ねて立項を見送ったが、本稿では年代順に充長の事蹟を網羅することを第一の目的と定めて立項するように方針を見直した。そのため、元禄十五年(一七〇二)・享保五年(一七二〇)の二項目を追補する。煩瑣な記述となることをお許し頂きたい。

元禄十五年(一七〇二) 三十二歳

● 八月、「二条家口伝」をまとめる。(愛媛大学附属図書館鈴鹿文庫蔵『短冊色紙書様』)

愛媛大学附属図書館鈴鹿文庫に『短冊色紙書様』（請求記号「Z8/Su20」が所蔵される。表紙右肩に「二条家口伝」「飛鳥井家口伝」と朱で記されるので、前半の二条家、後半の飛鳥井家と、二つの間書が取り合わされて一書にまとめられたことがわかる。前半の内題は「当流相伝短冊并色紙書様之事」。その「二条家口伝」の末尾に次の奥書がある。

右二条家口伝一冊、元禄拾五年中秋、於鶏床亭書写之畢。

仁木充長（花押）

私云、此一帖二仁木充長口伝書入有之、今別二記之。

本文を辿ってゆくと、確かに充長の見解の書き入れが施されている箇所があり、書写者は本来の「二条家口伝」と充長書き入れの區別がつくように留意して写している。

内容の検討は充長の歌学全般を対象とする別稿に委ねたいが、冷泉家に入門する正徳五年（一七一五）から遡ること十三年も前に、二条家の歌学に関心を寄せていたことは留意されてよい。充長としては伝統歌学の体得に早くから志を立て、さまざまに情報を収集しながら、江戸の歌壇に大きな影響を与えることになる冷泉家に目標を定めて行ったのであろう。

享保五年（一七二〇） 五十歳

● 十月、院使として江戸に下向した冷泉為綱と面談し、後水尾院の「桐葉御記」（「玉露稿」）を貸与する。（四五五頁）

『在京随筆』享保七年四月十五日条に為久から充長に返却された旨の記事があり、そこから貸与の経緯が知られるので、年月を定めて立項する必要が生じた。「桐葉御記」について、充長は次のように記す。小書きの部分は「」に入れて本文と区別した。

今日、桐葉御記（玉露稿共号。後水尾院勅話書集小冊也。）此本享保六冬中納言殿御下向之時入御覽、御帰京被為持之。冷武書写給由にて、御返却落手。

充長は為綱に貸与した時期を「享保六冬」とするが、享保六年九月以来充長は在京中で、為綱と頻繁に面会していたのだから、年を誤ったと見なさざるを得ない。為綱が院使として江戸に下向したのが享保五年十月（拙稿「成島信通年譜稿（二）」『江戸時代文学誌』第七号、一九九〇年二月一日）享保五年項参照）であり、正しくは「享保五冬」とあるべきところである。この折の面会で充長が為綱に貸与したと思われる。

なお、『在京随筆』の翻字では「後水尾院勅語」と読んでいたが、正しくは「勅話」である。この機会に訂正しておきたい。

「冷武」即ち為久が写本を作成して原本を充長に返却したことに関しては、享保七年四月十五日項で触れる。

享保七年（一七二二） 五十二歳

- 元旦、「試筆」の和歌「今朝霞む都の富士を見ても先春来かたに思ふ故郷」を詠む。年賀のため冷泉家に参上、それから禁裏に参上して節会拝見、冷泉家に滞留。（四三九頁）
- 正月二日、持明院家・柳原家・日野家・山科家に参上、冷泉家に戻り為綱と対面する。（四四〇頁）
- 正月三日、冷泉家より旅館に帰る。（四四〇頁）  
以下、公家の装束や江戸の年始に関する記述が続くのは、正月三日に禁裏や各家の年始の風俗を実見した成果を書き留めなくなったからであろう。
- 正月七日、冷泉家に参上、為久と対面し、白馬節会に参進する。為久に供奉する。節会終了後、冷泉家まで為久に従って宿に帰る。（四四〇頁）
- 正月八日、持明院家に参上、入木道や披講の稽古などを受ける。故基時筆の色紙下書を下され、年始書初の書法を承る。高井真政の所望を受けて故基輔筆「朗詠」を宿舍で書写するべく拝借する。持明院家に止宿。（四四二頁）（四四二頁）
- 該当箇所本文では、  
故中納言殿基輔御筆朗詠拝借之。高井氏依所望於旅館令書写故也。

- とあって、文面上「高井氏」の素性は明らかでないが、充長に持明院家伝来の貴重な文献の書写を依頼する「高井氏」とは、前稿（二）に述べた、充長にさまざまな配慮を与えるべく二条御藏奉行に outward を命じられたと思われる高井真政以外には考えられない。真政と確定する所以である。
- 正月九日、冷泉家に参上、晩景に旅館に帰る。（四四二頁）  
七日から九日までの動向を記した後に、諸家訪問により得た成果をまとめて掲げる。その中に「冷泉家古来武家門弟誓状之写」があり、この文面の形式が正徳五年十月五日の冷泉家入門時に充長が提出した誓状と一致することは、すでに前稿の正徳五年項で指摘している。なお、前稿では『在京随筆』享保七年正月七日条に誓状の書留がある旨記載したが、正しくは「正月七日以降」とするべきであった。ここに訂正しておきたい。
  - 正月十二日、禁裏に参上し、御修法壇を拝見する。持明院家に参上、その後冷泉家に参上して、止宿。（四四二頁）
  - 正月十三日、旅館に帰る。（四四二頁）
  - 正月十六日、冷泉家に参上。夜、禁裏にて踏歌節会を拝見し、冷泉家に止宿。（四四二頁）
  - 正月十七日、冷泉家に滞留。為久に詠草を見せる。（四四二頁）
  - 正月十八日、冷泉家より禁裏に参上、舞楽を見学する。冷泉家に帰宿。（四四二頁）

● 正月十九日、山科家・持明院家に参上して当主と対面。旅館に帰る。(四四三頁)

● 正月二十五日、冷泉家に参上、詠草を見せる。為久より書物を拝借する。(四四六頁)

● 正月二十六日、黄昏に持明院家に参上、止宿。(四四六頁)

● 正月二十七日、冷泉家に参上し、滞留。(四四六頁)

● 正月二十八日、山科家に参上。その後旅館に帰る。(四四六頁)

● 二月六日、冷泉家に参上し、滞留。(四四六頁)

● 二月七日、持明院家に参上。(四四六頁)

● 二月八日、山科家に参上し、堯言と対面。その後冷泉家に帰る。

(四四六頁)

● 二月九日、為久と対面、詠草を見せる。(四四六頁)

● 二月十日、晩に旅館に帰る。(四四六頁)

この間、五百蔵兵庫の所蔵する後西院・三条西実隆・道晃法親王の筆跡を写し取るなど、精力的に資料収集に従事している。

● 二月十五日、冷泉家に参上し、滞留。「飭抄」を拝借し、「唐鞍図」を写す。(四四八頁)

● 二月十六日、持明院家に参上。晩景に冷泉家に参上し、滞留。

(四四八頁)

● 二月十八日、為久と対面、詠草を見せる。冷泉家に滞留か。(四四八頁)

● 二月十九日、旅館に帰る。(四四八頁)

● 十九日条の後、内裏の日花門・月花門に関する項に続いて充長の和歌三首が載る。

宇治河

充長

おなじくは宇治の河橋都にも近からばとぞ思ひ渡りぬ

宇治河のいづく成らん橋の小島の崎も山吹の瀬も

臥見

臥見山禁の沢田見え渡る末に霞むや宇治の河橋

● 三月二日、冷泉家に参上。その後中井主水方に招かれ、土佐将監光芳と会い、終日懇談、晩景に冷泉家に再び参上し、止宿。

(四四九頁)

● 三月三日、禁裏に参上し、鬮鶏を拝見、その後持明院家に参上し、止宿。(四四九頁)

● 三月四日、朝、冷泉家に参上。その夜、為綱の体調すぐれず、お慰みのため対面し、懇談。(四四九頁)

為綱の体調について、この日の『在京随筆』の記事には、  
夜陰、中納言殿御所旁、為御慰、御対面御物語有之。

とあるのみ。『在京随筆』が現在の形にまとめ上げられたのは享保十年(一七二五)頃らしく(前稿参照)、三月四日の記述に筆を進めた充長は、二日後の為綱薨去を知識として有していたはずである。しかし、あくまでも日次の体裁を取る以上、言及は避けなければな

らなかったのだろう。

● 三月五日、巳刻に旅館に帰る。(四四九頁)

続いて絵所土佐家の系図や冷泉家蔵の後柏原院御製、為綱による堀河百首の源俊賴歌解など、ここ数日来の成果が書き留められる。

● 三月六日、早旦、為綱薨去。充長は嵐山の花見のため嵯峨に行く。暮に旅館に帰り、薨去を知らされる。追悼歌あり。(四五二頁)

享保七三月六日、冷泉前中納言殿為綱卿薨じ給ひしを悼奉りて  
充長

闇となる心ぞわかぬ憑こし恵の露の光かくれて

● 三月七日、朝、冷泉家に参上。夜、真如堂において納棺に立ち会う。夜半過ぎ冷泉家に戻り、止宿。(四五二頁)

● 三月八日、晩景、旅館に帰る。(四五二頁)

為綱薨去に至る動静を充長は次のように記す。

初春頃ヨリ中納言殿為綱卿所勞、当三月五日昼頃ヨリ俄変症、

難療養、六日早旦薨去旨告来。充長此日嵐山為花見往嵯峨。及

暮帰館。依之七日朝、冷泉家に参。夜陰納棺於真如堂。白小袖

狩衣風折烏帽子令着給也。充長供奉。夜半過、冷泉家に帰。八

日晩景、帰旅館。

法号

瑞華院從二位前権中納言智堂性覚大禪定門

真如堂は鈴声山真正極楽寺卜号。天台宗大僧正也。吉田神楽岡

ノ隣也。故山号如斯也。

たまたま嵯峨に出かけていたため為綱の薨去に立ち会えなかったことの無念さを押し隠すように、淡々とした記述に終始する。

● 三月十日、冷泉家に参上、真如堂の葬礼に供奉、冷泉家に帰る。(四五二頁)

この日、夕刻に為村、酉刻に為久が喪服を着て真如堂に参詣し、充長がそれぞれに立ち会う。葬礼は亥刻であった。

● 三月十一日、旅館に帰る。(四五二頁)

● 三月十七日、冷泉家に参上し、滞留。(四五二頁)

● 三月十八日、真如堂に参詣し、冷泉家に帰る。(四五二頁)

● 三月十九日、旅館に帰る。(四五二頁)

● 三月二十三日、冷泉家に参上し、滞留。(四五二頁)

● 三月二十四日、為村に付き従い真如堂に参詣する。冷泉家に帰る。(四五二頁)

● 三月二十五日、為久と対面、出題心得の伝授を受ける。為綱の法号を置字にした追福和歌十二首を為久に提示する。(四五二頁)

● 三月二十六日、真如堂に参詣し、追福和歌一卷を位牌の前に備え、冷泉家に帰る。(四五二頁)

充長の詠じた追福和歌十二首が二十六日の記事の後に置かれる

(四五二～四五三頁)。各歌の最初の文字の読み「すいけらむちとう

せうかく」を辿れば為綱の法号「瑞華院智堂性覚」となる。

春日詠十二首和歌

沙弥充長

春

住果し此世の外の春に今霞む光や西の山端

今はその野べのわかかなに摘かへてしきみ手向る春をしぞ思ふ  
けうそくををさへてめでし花桜匂ひことなる台にぞみむ

夏

井筒にぞよりて聞ぬる郭公あかくむ庵の暁の声

紫の雲みえそめて五月雨のはる、日影も西に入空  
塵もなき木の下水の岩がくれ法の心になふ涼しさ

秋

とく法の教か是も咲花の色香空しき野への百草

浮雲の晴行空に影みちて月も心も澄まさりぬる  
せめて此手向色なき言の葉に千入の紅葉折てそへなむ

冬

浦伝ひしたふや和歌の家の風なみふく跡に千鳥鳴也

影だにも移らばとのみしたふ哉氷れる冬の池の鏡に  
くからぬ心の道の跡なれや雪の御山を出し光は

この記事の後に、題に関するさまざまな教えを為久から得たと思しき記載が続くが、恐らく三月二十五日の伝授内容を反映したものである。

● 三月二十七日、仙洞御幸の行列を拝見する。冷泉家で朝食、巳下刻に旅館に帰る。(四五四頁)

● 四月一日、江戸からの指示が届き、持明院家に参上。その後冷泉家に参上し為村と対面、江戸への返簡を遣わすべく旅館に帰る。(四五五頁)

(四五五頁)

この日の行動はあわただしく、充長の在京が江戸幕府の御用と密接に関わることを自ずと示している。残念ながら用務の内容は明らかではない。

● 四月十一日、冷泉家・持明院家・山科家に参上、晩に真如堂に参詣し、冷泉家に滞留。(四五五頁)

● 四月十四日、旅館に帰る。誓願寺中竹林院に参り、懇望して什物の「頓阿古集句題百首和歌継懐紙」を写す。旅館に帰る。(四五五頁)

● 四月十五日、冷泉家に参上し滞留。「頓阿古集句題百首和歌自筆懐紙写」一巻を御覧に入れ、冷泉家本との校合が行われる。また、為綱に貸し出してあった後水尾院の「桐葉御記」(「玉露稿」)を為久より返却される。「拾愚東野州抄」も持参して御覧に入れる。(四五五頁)

「桐葉御記」(「玉露稿」)の為綱への貸し出しについては、享保五年十月項で述べた。為久が写本を作成し、充長所蔵本を返却したが四月十五日だったのであるが、もし、充長に返却を希望する意図

があったのであれば、上京早々に申し出ることもできたであろう。なぜ、翌七年の四月になってこのような遣り取りが生じたのか、いささか理解に苦しむところである。

以下はあくまでも想像にすぎないが、四月一日に届いた江戸からの書状の中に、冷泉家に貸与してある「桐葉御記」を江戸に持ち帰るようにとの指示が書き込まれていたのではなからうか。同様に、竹林院の「頓阿古集句題百首和歌継懐紙」を四月十四日に書写したのも、幕府からの新たな指示を受けての古典籍調査の一環だったのではないか。前日十四日の記事には「末刻、誓願寺中竹林院に参、什物頓阿古集句題百首和歌継懐紙懇望、写之。帰旅館。」とあった。「懇望」の二字が充長のただならぬ熱意を感じさせる。享保六年九月以来、充長は折々の調査成果を江戸表に送付していたに違いないが、重ねての江戸からの懇望に奮い立って調査に臨んだ充長の心に触れる思いがする。

- 四月十六日、御影祭を拝見して冷泉家に帰り、為村とともに真如堂に参詣、慈照寺を為村と散策する。(四五五頁)
- 四月十八日、真如堂に参詣し、冷泉家に帰る。(四五五頁)
- 四月十九日、葵祭を拝見し、行列の次第を記録する。(四五五頁)
- 四月二十日、旅館に帰る。(四五五頁)

この記事の後、長家に始まり為村に至る御子左家の系図を掲げ、長家から為綱までの歴代当主の和歌を「冷泉家御本」により写し取っ

ている(四五六―四六〇頁)。為綱の死を目の当たりにし、改めて冷泉家の血脈を辿ろうとする充長の思いを想定する。

- 五月三日、冷泉家に参上、冷泉家の「百人首」「百人一首」かの校合を許される。その後持明院家に参上、披講、今様、朗詠の稽古に従事。晚景、旅館に帰る。(四六〇頁)

● 五月七日、冷泉家・持明院家に参上。披講、朗詠の稽古あり。持明院家で石野中納言基顕と会い、旅館に帰る。(四六二頁) 石野基顕は持明院基時の次男で、石野家の家祖となった。享保七年時点で従二位前権中納言、五十三歳(『公卿補任』)。実家に顔を出したところ充長と際会したらしい。

『在京随筆』で記載の日が明記されるのはここまでである。以下、享保九年(一七二四)・十年(一七二五)の追補を確認できる箇所も見出せるが、それらは該当する年月日に本稿の筆が及んだ段階に取り上げることとする。

- 夏、「顕註密勘」を校合する。(海野氏稿)
- 海野氏稿に国文学研究資料館初雁文庫蔵『古今倭哥集抄 顕註密勘』の充長識語が紹介され、第一冊の裏表紙に「享保七夏 仁木省二充長」と朱書される旨の指摘がある。享保七年の立夏は三月二十二日、立秋は六月二十六日で、この間のいずれかの日としか定めようがないが、京滞在中の事蹟であることは明白なので、ここに立項した。



● 夏、同行者とともに唐崎の松や三井寺など琵琶湖畔を周遊し、

大津に宿泊、石山寺に参詣して京に帰るか。(国立公文書館内閣

文庫蔵『視聽草』六集之四所収「都余波」)

宮崎成身編『視聽草』六集之四に「季秋吟行」とともに収録された「都余波」は、享保七年八月二十四日に京を発って江戸に帰る際の紀行文であり、前稿の八月二十四日項に旅の概略を記したが、出発前の状況や旅程の詳細を辿ることはしなかった。また、往路の「季秋吟行」とは異なって「都余波」には日付の記載がなく、前後の記述から日程・旅程を再現しなければならない。可能な限り本文に依拠して充長の動向・心情を正確に辿るよう努めたい。特に本項のもとなる記事は八月二十四日の京出発の行程の中に挿入されるので、事実関係の認定には相応の考証が必要となる。引用に当って適宜句読点・濁点等を施すなど、前稿(二)と同様の方針による。

八月二十四日の石山寺に上る記事の後に次の一節がある。

過し夏のころ、ひとりふたりみやこを朝まだきに出たち、唐崎の松のもとにて眺望し、坂下山王八王子客人宮拜めぐりて三井寺にまふづ。この道すがらの景勝たり。東に東に湖水、鏡山、三上山みえわたり、西に比良高根、をひえ、おほひえ、志賀の山、旧都の跡も此あたりとぞ。長等山などみねつらなる。伊吹山は、東北のあはいに遠く見ゆ。

さて、大津に一夜とまりて石山にのぼり、岩間にかゝり、か

さどりの里、かさどりの山、醍醐をこえてくるすのを過、しる  
谷より京かへりしこともはべりき。

まず「過し夏」が何年の夏かという問題がある。前年の享保六年は九月三日に江戸を発している(前稿・前稿(二)参照)から該当しない。前稿ではこの折が初の上京であろうと推測したが、正徳五年の冷泉家入門時に上京した可能性も残される。しかし、充長が冷泉家入門の誓状を提出したのは十月五日付であり(前稿参照)、夏ではなかった。となると、京に滞在して夏を迎えたのは享保七年以外には考えられないことになる。『在京随筆』は五月七日より後の記載を欠くので裏付けは取れないものの、充長が心を通わせる親しい友人と一泊二日の周遊を楽しんだのは確かなだろう。そして、同行者としては恐らくは高井真政あたりを想定できるのではないか。

● 八月十五日、「またいつのあきにきてみむ望月のこよひ都のあかぬなごりも」の歌を詠む。(都余波)

「都余波」の書き出しは、『在京随筆』に評述される日々の総括や冷泉家の人々との惜別の記録として有意義な記述を含む。冒頭から本項の根拠となる箇所までを次に掲げる。

去年の秋より都に住侍りて、愚なるころにも歌よむべき詞のつゞけがらわきまへ侍らまほしく、もしは草かきしたゝむべきさま、うつばりの塵をたてしうたひものなど習さぶらばやと、折く冷泉家・持明院家に参侍りぬ。

そも、いともかしこき内侍所御神楽拜見し侍りしより、  
聖廟にて氏人獻策などあら玉の年の始の節会、白馬、踏歌、御  
修法、舞御覽、左儀長、鬮鴉、或は院の御幸の粧、御影祭の神  
幸、葵祭の近衛使、東遊の舞人陪従かみさびたる有様、短筆に  
はかき尽しがたし。競馬、祇園会、又ふるめかし。

さて、名所旧跡、花のさかり、紅葉のころの折、すべて巡覽  
し侍りしに、とりわき心とまりて覺侍るは、嵐山の花のころ  
なり。松の木の間にさきまじりて、禁には後さしくだし、若駄  
とる大井川の岩浪清き流のさま、亀のお山の亀ににたる姿など、  
このもかもの詠なり。広沢の池、名こそこの滝の跡、高雄の紅  
葉、清滝のながれ、臥見の眺望、宇治の佳景、東山には舞台の桜、  
通天の紅葉、又おかし。すべて山の姿なだらかにつらなり、河  
のおもとをあさにながれて、草も木も花の色香うるはしく、水  
石いさぎよし。愛宕の嶺、比叡の山、しぐる、雲のた、ずまひ、  
つもれる雪の姿など、朝夕めなれ侍き。

かくてやどれる所は二条知己の旅館なり。今年八月、よきと  
もなひにこそと具してあづまのかたにかへるべきにおもひなり  
ぬ。もとより行とまるかどを宿となしてむ身なれど、さすがに  
故郷なれば、とかくさだむること有り。十五夜に、

またいつのあぎにきてみむ望月のこよひ都のあかぬなごりも  
歌道修行を第一の目的としながらも、宮廷行事のいろいろや四季

折々の名所旧跡の景観など、充長の感興をそそる広範囲の対象が列  
挙されてゆく。それを受けて「かくてやどれる所は二条知己の旅  
館なり」と述べ、二条御威奉行の高井真政から宿舎を提供されてい  
たことを示唆しつつ、江戸に帰る同行者を得て帰心を募らせる状況  
を語る。「もとより行とまるかどを宿となしてむ身なれど」以下は、  
「世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやとさだむる」  
（古今和歌集・雑下・九八七・よみ人しらず）を踏まえ、寄る辺の  
無い処士の身軽さと心細さを口にしつつ、半ば公務に近い今回の滞  
京後の処理がさまざまに待ち構えることをも暗示する。それらの感  
慨を述べた上で、八月十五夜の月に再びの上京を思い描くのがこの  
和歌の趣旨となる。

● 八月十六日以降二十三日までの間、冷泉家・持明院家他に暇乞  
のため参上し、冷泉為久・為村他冷泉家の人々と惜別の歌を詠  
み合う。（『都余波』・『冷泉為久集』）

前項の引用に引き続き「都余波」の本文を掲げる。

冷泉家・持明院家・山科家・柳原家・日野家などに御暇乞に  
参として、冷泉家にてと計申上侍し、

なごり猶袖こそしほれふた代まで恵かけゝる和歌のうら波  
今年弥生のころ、冷泉家前中納言殿為綱卿かくれさせ給へど、  
右兵衛督殿為久卿、同御心に仰ごとうけ給り侍り、かたじけな  
きあまりなりけむかし。さて御返事給はりぬ。

二代までかけ、る契りわすれずはこ、ろをよせよ和歌のうら  
なみ

侍從殿為村朝臣、今年十一にならせ給ふが、餞別とてたまはせ  
ける、

別ゆく人はとまらぬあふさかにへだつる関の有かひもなき

御返し奉れり。

言の葉の恵はずれぬこ、ろをばまたあふさかの関にとぐめつ

藤原清基

またもこむ契りわすれそ此たびはこ、ろをとめぬわかれなり

とも

返し、

またこむと契りおくにもあかでのみやこのこす心しらな

む

『在京隨筆』の冒頭に「冷泉家持明院家山科家仰条々」の副題が  
備わることでも知られるように、充長と日野家の関係は他家と比  
べて薄く、享保七年正月二日に日野家に参上したことがわずかに確  
認できる程度である。(ママ)を付した「はずれぬ」は「わすれぬ」  
の誤写と判断した。「藤原清基」は冷泉家の雑掌中川(中河)清基。

なお、充長と為久の贈答歌は、宮城県図書館伊達文庫蔵『冷泉為  
久集』にも収められる。

同年秋、沙弥充長、あづまのかたにしり侍るとて、名残猶袖

こそしほれ二代まで恵かけたる和歌の浦浪、と申侍りしかば、  
返し、

二代までかけ、る契りわすれずは心をよせよ和歌のうらなみ

詞書にいう「同年秋」とは、この前に為綱の薨去に関わる記事が  
あるので、享保七年と定められる。(ママ)を付した「しり」は意  
味上「かへり」とあるべきところで、「し」(字母「志」)は「かへ」  
(字母「可」「部」)の誤写の可能性がある。充長歌の四句が「都余波」  
とは異なって「恵かけたる」の形を取るが、為久の応答が「都余波」  
と共通して「二代までかけ、る」とある以上、「かけ、る」の方が  
正しいと見てよいだろう。『冷泉為久集』の書写者が踊り字「、」  
から「る」に続く箇所を「た」と誤認したと判断する。

○ 八月二十四日、離京して江戸に帰る。九月十一日付で「都余波」  
脱稿。

前稿では、庵原川を渡る頃に今日が九月一日に当ることに改めて  
気付くといった具合に、充長には毎日の日程・旅程を正確に記録す  
るといふ意識が乏しいこと、江戸に帰着したのが九月四日と考えら  
れること、八月十四日に起こった伊勢湾の津波の被害を熟田で実見  
したこと、巻末の識語から九月十一日に「都余波」を脱稿したらしい  
ことなどに言及した。本稿では日次形式で日程・旅程を明らかに

するよう努める。日付と出発・到着を明示し、経由地や名所など固有名詞を括弧に入れて掲げ、充長の詠歌状況を明らかにするのに必要な本文を引用するなど、記述の方針は前稿(二)の「季秋吟行」と同様である。

● 八月二十四日、未明に京出立、大津を経て土山着。(堀河の橋、三条、白河の橋、山科四宮河原諸羽明神、大津、うち出の浜、おもの、浜、あわづが原、とり河、石山、蛍谷、供御の瀬、田上山、まがりの里、石部、布引山、なつみの里、田河、水口、土山) 本年八月十五日の項に引いた冒頭部、続いて八月十六日から二十三日までの間と見定めた冷泉家の人々との贈答記事となり、いよいよ八月二十四日の出発を迎える。

かくて廿日あまり四日、暁かけて出立ぬ。昨日の夜おどろくしき風もなき、雨もをやみて、堀河の橋うち渡り、三条より白河の橋をゆく。山科四宮河原諸羽明神遙拝してゆくに、日かげさし出たり。大津を過るとて、

都をばうち出の浜のさゝらなみかへるさとをしふるさとの道  
おもの、浜、あわづが原など過て、とり河といふ所に石の橋  
有。こゝに従者をのこして石山にともなひゆく道すがら、いと  
面白し。蛍谷といふ有。蛍の出る所なりといふ。尾花、藤ばかり  
ま、をみなへし、こなぎなど、湖水のはた、田のくろに咲まじ

る。供御の瀬、田上山など見渡しつゝ、山にのぼれり。

秋の日ははれて湖でるいしやまのみねよりみゆる瀬田の長は  
し

京を出て東海道を東に向かい、大津を経て「とり河」(現在の天津市鳥居川町か)で従者を待たせて石山寺を目指したという。この記述の後、夏に立項した「過し夏のころ」以下の琵琶湖畔周遊の記事に切り替わるので、大津に一泊して石山から岩間・笠取・醍醐・栗栖野・汁谷を経て京に帰る道程が今回の帰途とは無関係であることを了解しつつ読まなければならない。突然過去の旅に筆が転ずるのでいささか混乱をきたすところである。

次の「まがりの里」から本来の旅の描写に戻る。こととなる。

まがりの里にて、

世と、もにながれゆくらしまがり河まがるもなをき水のこ、  
ろは

石部を行に、堤のやうなる山あり。布引山といふ。なつみの里、田河など過ゆく。今日はおもふやどりにと、暮るをもいとはで水口のあたりいそぎゆけど、河など水まさりたる所有て、とかくして成過るばかりに土山の駅にとまりぬ。

● 第一日の記事が錯綜するため、順番が前後する形ではあるが全文を掲げた。

● 八月二十五日、土山発、桑名着。桑名より乗船。(坂の下、鈴鹿山、

ゑびす岩、大黒岩、野尻、庄野、石薬師、鈴鹿河、日永、浜田、四日市、桑名、大湍生浦)

● 八月二十六日、曙に熱田に上陸、高潮の惨状を見る。御油着。(熱田、なるみがた、呼継の浜、笠寺の観音、あしや、いも河、参河の七平、松平、九久平、篠平、比良平、柿平、塩平、生平、大平河、ひぢ河、赤坂、しかすがの渡、御油)  
熱田で充長が詠じた和歌は前稿に引いたが、当日条の冒頭から改めて掲げておく。

梶の音、浪の声、夢にまじりて曙に熱田につきて見侍れば、  
さりぬる十四日の夜、高しほうちいりて、民家おほくやぶれ、  
ながれうせて、石ずへ計残りしも有けり。

むまやぢは有しにもあらずなるみがたあれける浪の跡のあは  
れさ  
(後略)

宇佐美龍夫氏『最新版 日本被害地震総覧「四一六」——二〇〇一年四月一五日』は、八月十四日の津波について、「尾張・伊勢・志摩・紀伊の海岸に津波、家屋流亡し死あり。地震記事見当らず。」(同書九四頁)と記す。伊勢湾沿岸を襲った高潮は地震由来のものではなかったらしい。

● 八月二十七日、御油発、浜松着。(吉田、今橋、ふた川、石巻山、

たて岩、秋葉山、あらみ、洲崎、まへ坂、浜まつ)

● 八月二十八日、浜松発、金谷着。(袋井の七社、腹河、脊河、をくじら山、めくじら山、菊河の橋、新坂、さよの中山、西行、金谷)

夜中より雨しきりなれど、寅過る比出たつ。袋井の七社といふ所を行に、をやみぬる空ながらあまつゝ、みとるべくもなし。それより行に、東のかたを腹河といひ、西のかたを脊河といふ河あり。

この里はひがしはら河にし脊河なかうちゆくに見所もなし  
などたはぶれ行に、空もはれたり。をくじら山、めくじら山といふ有。碁石の出る所ときこゆ。菊河の橋を渡るとて、  
いかで名に流そめけむきく河の浪の花には秋もわかぬを

新坂をのぼり、さよの中山をまたこゆるに、西行の歌おもひいづ。金谷の駅にて暮かゝる比やどりとる。

本文中には「七社」とあるが、「七社」の誤写と判断して見出しを改める。

● 八月二十九日、金谷発、江尻着。(大井河、島田、富士、藤枝、岡部、景よりの橋、あこめの里、あこめ河、わらしな河、阿部の市、浅間社、賤機山、江尻)

● 九月一日、江尻発、三島着。(庵原河、巨鼈山、清見がた、みほの松原、ふじのね、蒲原、田子の浦、芝河、吉原、原、帆かけ

山、東がへしのさと、みしま)

この日は、京出発からの日取りを再確認し、和歌を三首も残すなど、言及すべきことが多いので、冒頭から引用する。

例のころ出たち、庵原河を渡るに明はなれ、空はれたり。旅行にまぎれて日数の過るをもわすれがち也。都を出しより手をおれば、八月も過て今日は九月一日なりけり。それより巨鼈山に立より、清見がたにて、

こぎ出てみるめはさぞな清見がたみほの松原雪のふじのね  
蒲原のなはてを行に、松間より富士みねみゆ。

磯山のうへに富士をぞみつ、ゆくしほくむ田子の浦づたひし  
て

芝河の末高瀬にのり、吉原にて休み侍り。なによけむともとむれば、かつをあり。このうを、あづまにはおほかれど、京のかたには稀にして、ひと、せのうちてうげざれば、めづらしくて、九献かたぶけなどして原にゆく。

よのつねの空に棚引しら雲もふじの高根のなかばにぞみる

(後略)

● 九月二日、三島発、大磯着。(さ、原、山中、畑、すくも沢、大磯、ふじ)

● 九月三日、大磯発、神奈川着。(梅沢、吾妻明神、かまくら山、玉なは、真名鶴が崎、土肥、神奈川)

● 九月四日、神奈川発、江戸到着。(川崎、矢口、鈴が森、江戸、日本橋、土峰、柴浦)

いよいよ旅の最終日、充長も従者も江戸到着に心を浮き立たせる様子が窺える。末尾の奥書まで全文を引く。

今日は故郷に帰つくべきなれば、上下みなよろこびきおひて、夜ふかくおきてものした、む。川崎を過、矢口の渡り舟にのる。是より鈴が森のあたりまでは海辺をゆく道なり。そも、京のかたは天津より大坂にのぼりゆけば、一、三里がほどはみな山の中をこえゆき侍る。江戸は又かくのごとく海辺づたひにしてのぼりくだれる国の有さまなりけむかし。日本橋を渡りゆくに、柳宮千秋の雪土峰に映じ、万里の船柴浦につなげり。

享保七年九月十一日 仁木省二沙弥充長

山越えの京入りとは異なり、富士を遠望しつつ海辺を辿って江戸に入る興趣を味わいながら江戸の泰平を寿ぐ筆致が、一年ぶりの江戸帰着の喜びを伝える。江戸人仁木充長ならではの感懐なのである。

九月四日に自宅に帰り着いて、十一日には「都余波」を脱稿する。想定される第一の読者は冷泉為久・為村親子であろう。勿論、京への出張の報告として、幕府の当事者の目に触れることも念頭に置いてはいるはずである。

● この年か翌享保八年(一七二三)の九月十三日頃、「渡月」題

で「わすれめや淀のわたりの秋の水舟ながらみし長月のかげ」を詠み、この和歌を含む詠草を冷泉為久に送って、為久より返歌を賜るか。（『冷泉為久集』）

『冷泉為久集』の享保九年（一七二四）三月為綱三回忌追善記事の前に次の二首が載る。

渡月

充長

わすれめや淀のわたりの秋の水舟ながらみし長月のかげ

此詠艸のおくに

忘れずは淀のわたりの秋の水立かへりみよ長月の影

まず、充長の和歌は、享保六年九月十三夜に伏見から淀川を下って難波に向かった船中の詠「わすれめや後の名におふ淀伏見月にさほさす秋の河ぶね」（前稿（二）享保六年九月十三日項参照）を間違いなく念頭に置いている。淀川の水面に映る月に舟の棹が当たる様を、「渡月」の題と「舟ながらみし長月のかげ」の言葉で再現し、その光景を決して忘れないと表明して見せたのである。『冷泉為久集』の歌順は年代に沿って厳密に定められているわけではないが、享保六年九月より後、同九年三月よりも前に詠まれたと推定するのが妥当であろう。

次に為久の返歌であるが、詞書に「此詠艸のおくに」とあるのは、充長が冷泉家に呈上した詠草の中に「わすれめや」の歌があり、その詠草に為久が応答のつもりで記したと見てよからう。淀川下りの

折の十三夜の月が忘れられないのなら、また立ち戻って見てくれと為久はいう。充長がまた顔を見せてくれることを慫慂するのが主意となる。

問題はこの贈答がいつ行われたかということである。享保八年であっても、九月十八日に藤沢に向け江戸を発している（前稿参照）から、十三日に自宅で二年前の船上の観月を追懐することはできる。項目を立てるに当たってその可能性は残した。しかし、状況としては、九月十一日に完成した「都余波」に添えて今回の在京に関する自詠を詠草としてまとめて冷泉家に贈呈するに際し、折しも迎えた九月十三夜の月を眺めつつ、ちょうど一年前の船上の作を思い返して「わすれめや」歌を詠み、冷泉家から受けた厚遇への感謝を込めたと見る方が、充長の思いとしては納得しやすい。（以下、続稿）

付記 本稿は、二〇二二（令和三）年度科学研究費補助金基盤研究（C）

「成島信遍研究―幕臣文人の事績を通して見る近世中期江戸文壇の特徴―」による研究成果の一部である。

―くぼた・けいいち、広島大学大学院人間社会科学専攻科教授―